

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520029

研究課題名(和文)「生命の哲学」における生存肯定の基礎的研究

研究課題名(英文) A Philosophical Research on the Affirmation of Existence in the Philosophy of Life

研究代表者

森岡 正博 (MORIOKA, Masahiro)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：80192780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において以下の研究成果が得られた。(1)「生存肯定」は「誕生肯定」のひとつの形式として解釈されるべきである。そしてそれは「産み」の概念と関連づけられるべきである。(2)デイヴィッド・ベネターの非-出生主義はきびしく批判されなければならない。(3)ペルソナ論には、実体性に基づいたものと関係性に基づいたものがある。(4)「生存肯定」は「人間のいのちの尊厳」と深い関わりを有している。

研究成果の概要(英文)：In this research the following results were obtained: 1) the affirmation of existence should be interpreted as a form of birth affirmation, and it should also be connected with the concept of giving birth, 2) David Benatar's anti-natalism ought to be severely criticized, 3) the persona argument has two origins, the entity-based one and the relationship-based one, and 4) the affirmation of existence has a fundamental connection with the concept of dignity of human life.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学

キーワード：生命の哲学 生命倫理 環境哲学

## 1 研究開始当初の背景

申請者はかねてより「生命の哲学」というジャンルを現代哲学の中に提唱する試みを行ってきた。それをさらに進展させるために、「生存肯定」という概念を掘り下げることによって、「生命の哲学」の基盤を構築しようというのが本研究の発想であった。生存を肯定する思想の前に立ちほだかるのは、生存を否定しようとする思想である。それと対決するためにも、生存に関する哲学的・倫理的思索を深め、先行研究を摂取・批判しながら新しい地平を切り開くことを課題とした。

また、生存肯定と深く関わる主題として、申請者が研究を続けてきた人格性＝ペルソナ概念についても引き続き考察を行なうこととした。なぜなら、人間を対象とするときに、生存する主体としての人格性の問題は避けては通れないものだからである。ここを切り口とすることによって、生命の哲学はさらに豊かなものになっていくと考えられた。

## 2 研究の目的

生存肯定という概念をとおして、「生命の哲学」を進展させることが本研究の目的である。当初の計画としては、(1) 生延長の生命哲学、(2) 将来世代産出の義務、(3) 「誕生の肯定」論、(4) メタ「生命の哲学」論の四つの主題に即して、先行研究を慎重に検討し、申請者の独自の哲学的考察を加えていくという予定であった。研究を進行させていくうちに、生延長の生命哲学と将来世代産出の義務については、非出生主義の哲学の検討へと統合されていき、さらにそれは「誕生肯定」と「誕生否定」についての概念分析へと展開していくこととなった。

また、その概念分析の作業が一種のメタ「生命の哲学」の試みとなった。さらに、人格性＝ペルソナの思想史的分析を行なうことによって、「生命の哲学」の範囲を拡大させることができた。当初の研究計画は、「研究成果」の項に詳述するようなものへと変容していった。そして結果的に、それらの研究を行なうことによって、「生存肯定」の意味するものを哲学的に深めることに成功し、「生命の哲学」を進展させるという当初の研究目的を遂行することができたと言える。

## 3 研究の方法

研究は文献を用いた哲学的手法を基礎としつつ、国内各地での研究会や検討会を開催してこの領域の新知見を広く収集吟味し、また研究で得られた知見を国際的な学会や研究集会で発表し、国際的なディスカッションに貢献していくというやり方を取ることにした。

文献としては、生と死の分析哲学、西洋の人格論、人間の尊厳論などを中心に、日本語および英語で書かれた文献を幅広く収集した。また生命倫理学、環境哲学に関する最新の研究書なども収集して考察を加えた。

研究の発表と交流のために、国内学会では応用哲学会、比較思想学会、国際学会ではドイツ日本社会科学学会、上廣カーネギーオックスフォード倫理集会にて発表し、またミシガン大学等にて研究発表と公開講演会を行なった。また、現代生命哲学研究所にて開催される研究会にて最新情報の収集と議論を重ねた。

## 4 研究成果

研究成果は、当初予想したものの枠を超えて

広がり、最終的におよそ以下の四つの帰結を生み出した。

#### (1) 生存肯定および誕生肯定の概念の発展

本研究の中心的な課題である「生存肯定」について理論的な考察を進めた。その結果、私が以前より提唱してきた概念である「誕生肯定」をさらに深化させることが本研究の本筋にもっとも寄与するという見通しが得られた。そのために、まず「誕生肯定」の否定形である「誕生否定」の概念を論文「「生まれてこなければよかった」の意味」で分析した。結果として、「誕生否定」には二つの形式があることが分かった。ひとつはその「無化解釈」で、それは「「生まれてこなければよかった」とは、「私が生まれてくるという出来事が過去において起きなかった」という歴史を持つ世界が、私の存在しないいまここでありありと実現することを、私がいまここで心から欲することなのである」と定式化される。もうひとつはその「別世界解釈」で、それは「「生まれてこなければよかった」とは、現状とはまったく内容の異なる世界がもしあり得るとして、その世界では私のかかえている深刻な問題が解決されているとするならば、そのようなあり方を持つ世界のなかに私は生まれてきたかった、と私がいまここで心から欲することなのである」と定式化される。この二つを比較したときに、「無化解釈」においては、当の状況についての理解可能性および実行可能性がともに満たされないが、「別世界解釈」においては、理解可能性は満たされるものの実行可能性は満たされないことが導かれた。この成果は、本研究によって得られたオリジナルな成果であると考えられる。

これらに対応して「誕生肯定」についても二つの定式化があることが分かった。すなわち「無

化解釈」に対応するものとしては、「「生まれてきて本当によかった」とは、「私が生まれてくるという出来事が過去において起きた」という歴史を持つ世界が、いまここでありありと実現していることを私が肯定し、受容し、そのことに感謝し、そのことに対して自己充足することである」となり、「別世界解釈」に対応するものとしては、「「生まれてきて本当によかった」とは、現状とはまったく内容の異なる世界がもしあり得るとして、たとえその世界では私のかかえている深刻な問題が解決されていたとしても、そのようなあり方を持つ世界のなかに私は生まれてきたかったと私がいまここで心から欲したりしないことである」となる。「誕生肯定」をこのように分析することによって、本研究の課題である「生存肯定」の研究が新たな段階へと引き上げられた。これをもって、本研究の第一の成果とみなすことができる。

またこの考察からの付随的産物として「産み」についての哲学的分析を行なった。「誕生」と「産み」はセットの概念であるが、後者に関してこれまで本格的な先行研究は見られなかった。共同研究者である居永正宏が「産み」についての哲学的論文を刊行したのを受け、それを批判的に吟味する形で論文「「産み」の概念についての哲学的考察」を発表した。その結果、「産み」の概念の必要条件として「外化」および「分離」および「子ども性」があり、「産み」の概念の強調点として「抛出性」「妊娠」「変容あるいは他者性」「遺伝子的なつながり」「いのちの連鎖」があることが解明された。これについては今後の研究においてさらに慎重に検討を進める予定である。

#### (2) 非出生主義の哲学の批判的検討

「生存肯定」を否定する哲学としてデイヴィ

ッド・ベネターの『Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence』を詳細に検討し、その論理に欠陥があることを指摘した。すなわち、「生まれてきたとき」と「生まれてこなかったとき」を比較したときに、後者が前者よりも「より良い」とベネターは主張する。その二つを比較するためには、「生まれてこなかったとき」というものをどうやって評価すればいいかを定めなくてはならないのだが、ベネターはそれを、「もし仮に生まれてきていたならばそのときに経験していたであろうこと」を反事実的に想定して評価すればいいとしたのである。ところがこの反事実的な想定それ自体が、この問題を解決する手法として適切ではないことを私は論文「「生まれてくること」は望ましいのか」において立証した。ベネターの議論は現在英語圏の分析的倫理学において話題を集めており、今後、それら英語圏の議論へと参入してさらなる考察を行いたいと考えている。

またこれに関連して、非出生主義の大物であるショーペンハウアーの生命の哲学についての考察を行なった。ベネターの非出生主義の発想のほとんどすべてはショーペンハウアーから来ていることが明らかになった。またショーペンハウアーから古代インドのウパニシャッドとブッダの哲学思想へと線を引くことができ、その延長線上で、ブッダの生命の哲学をこの視点から検討する必要性が生じてきた。このテーマについては今後引き続き研究する予定である。

### (3) 人格 = ペルソナ論の展開

人格 = ペルソナ論については、かねてより研究を続けてきたが、本研究においてはそれを思想史の視点から位置づけることを目指した。まず、和辻哲郎がエッセイ「面とペルソナ」において、私のペルソナ論に相通じる議論を行な

っていることを確認した。和辻は能面と能役者のダイナミズムの中にペルソナの出現を発見しており、それは関係性から立ち現われるペルソナという私の論と整合性があると言える。これについて論文「ペルソナと和辻哲郎」を刊行した。また、ペルソナ思想史をさらに遡り、西洋古代のペルソナ論を考察したところ、ペルソナには二つの系列があることが分かった。ひとつは理性と自由意志を保有した存在を意味するもので、これが近代哲学を経て今日のパーソン論へと引き継がれている。もうひとつは聖霊の動きに代表されるような関係論的なペルソナ概念であり、ギリシア語でヒュポスタシスと呼ばれ、その後キリスト教の三位一体を指すようになったものである。この後者こそが、私がペルソナという言葉で呼ぼうとしていたもの、すなわち関係性の中から立ち現われてくる人格性であることが判明した。これについて論文「ペルソナ論の現代的意義」を刊行した。現代の生命倫理の最先端で発見されたペルソナ概念が、遠く古代の概念にまで遡る可能性が出てきたことになる。この点についても今後引き続き研究を続ける予定である。

### (4) 人間のいのちの尊厳についての考察

「生存肯定」と「ペルソナ」について研究を進めるうちに、それが人間の尊厳 human dignity の問題と深く関わっていることが分かってきた。そもそも西洋思想においては、人格 = ペルソナこそが、尊厳をもつ存在として同定されてきたのであり、それはまた「生存肯定」を言うときの対象として考えられている。そこで私は近代の尊厳論を基礎づけたカントの哲学を再検討し、まずはカントの言う尊厳が何を意味しているのかを詳細に把握した。そしてそこに見出されたものを今日的な言葉で言い直すな

らば、「人生の尊厳」というべきものであると考えた。そのように捉えたとき、生命倫理の状況によって要請されている尊厳として「身体の尊厳」があり、環境倫理の状況によって要請されている尊厳として「生命のつながりの尊厳」があるように思われた。これら3つの尊厳は、人間が「いのち」という形式をとって存在していることから出現したと考えられる。私はこれをとくに「人間のいのちの尊厳」と呼ぶことにした。

西洋近代において基礎づけられた「人間の尊厳」を、今日的な状況に照らして「人間のいのちの尊厳」として展開するという研究テーマが現われてきた。これについてハイデガー研究会にて発表し、現在論文を執筆中である。「生存肯定」の研究が、「人間のいのちの尊厳」の研究へと発展したことになる。

以上のように、「生存肯定」というキーワードを手がかりにして、上記のような研究成果をあげることができた。今後の研究としては、本研究で得られた「誕生肯定」の概念をさらに洗練させることと、本研究によって新たに発見された「人間のいのちの尊厳」の概念をさらに深く掘り下げることが必要である。研究成果は、国内・国外の学会・研究集会・講演会などで発表することができ、また日本語・英語の論文を刊行することができた。また、本務校の現代生命哲学研究所より発行している学術誌 *Journal of Philosophy of Life* および現代生命哲学研究から関連投稿論文を定期的に刊行することができた。

以上をもって、当初の研究計画で意図されていたことはおおむね達成できたと自己評価している。

## 5 主な発表論文等

[ 雑誌論文 ] (計 12 件)

森岡正博「「産み」の概念についての哲学的考察」『現代生命哲学研究』3、査読無、2014、109-130

森岡正博「サステナビリティ学において何がサステイナブルであるべきなのか」『人間科学：大阪府立大学紀要』9、査読無、2014、35-61

Masahiro Morioka, How a Japanese Philosopher Encountered Bioethics, *Ethics in Science and Society: German and Japanese Views*, 査読無、2013:27-41

森岡正博、「生まれてこなければよかった」の意味」『人間科学：大阪府立大学紀要』8、査読無、2013、87-105

森岡正博、「生まれてくることは望ましいのか」『The Review of Life Studies』3、査読無、2013、1-9

森岡正博、道徳性の生物学的エンハンスメントはなぜ受け入れがたいのか？」『現代生命哲学研究』2、査読無、2013、102-113

森岡正博、「他我はこの私である」ということの意味」『現代生命哲学研究』2、査読無、2013、1-22

森岡正博、「ペルソナと和辻哲郎」、『現代生命哲学研究』1、査読無、2012、1-10

Masahiro Morioka, Human Dignity and the Manipulation of the Sense of Happiness, *Journal of Philosophy of Life*, Vol.2, No.1, 査読有、2012:1-14

森岡正博、私が応用哲学だ！、『これが応用哲学だ！』（戸田山和久ほか編、大隅書店）査読無、2012、106-113

Masahiro Morioka, Natural Right to Grow and Die in the Form of Wholeness,

*Diogenes*, Vol.57, No.3, 査読有、2011:103-116

森岡正博、「生命の哲学」、『応用哲学を学ぶ人のために』(戸田山和久ほか編、世界思想社) 査読無、2011、198-208

[学会発表](計12件)

森岡正博、人間のいのちの尊厳について、ハイデガーフォーラム第8回大会、2013年9月21日、関西大学、吹田

森岡正博、ペルソナ論の現代的意義、比較思想学会40周年記念大会、2013年6月16日、大正大学、東京

森岡正博、生まれてこなければよかったとはどういう意味か、応用哲学会第5回年次大会、2013年4月20日、南山大学、名古屋

森岡正博、将来世代を産出する義務はあるか?、日本生命倫理学会第24回年次大会、2012年10月27日、立命館大学、京都

Masahiro Morioka, Brain Death, the Concept of 'Persona,' and the Principle of Wholeness, Center for Ethics and Humanities in the Life Sciences, 2012年9月28日、Michigan State University, 米国

Masahiro Morioka, The Concept of Persona in Bioethics and the Philosophy of Tetsuro Watsuji, CJS Noon Lecture, Center for Japanese Studies, 2012年9月20日、University of Michigan, 米国

Masahiro Morioka, The Concept of Persona: An Alternative to the Concept of Person, Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012 on Life: Its Nature, Value and Meaning, 2012年5月18日、国際文化会館、東京

森岡正博、幸福感の操作と人間の尊厳、応用哲学会第4回大会、2012年4月21日、千葉大学、千葉

森岡正博、「誕生」概念と「誕生肯定」概念

の哲学的考察、応用哲学会第3回大会、2011年9月25日、京都大学、京都

Masahiro Morioka, Criticism of Moral Bioenhancement: Commentary on Julian Savulescu, Fourth GABEX International Conference, 2012年1月7日、東京大学、東京

Masahiro Morioka, Foundation of Ethics in the Age of Technology, 2011 Annual Conference, VSJF - German Association for Social Science Research on Japan, 2011年11月27日、Heinrich-Pesch-Haus, Ludwigshafen, ドイツ

Masahiro Morioka, Some Preliminary Remarks on Human Dignity and the Manipulation of the Sense of Happiness, 2011 Carnegie-Uehiro-Oxford Conference on "Shaping Moral Psychology", 2011年11月8日、Carnegie Council, NY、米国

[図書](計2件)

森岡正博、まんが哲学入門、講談社、2013、277

森岡正博、生者と死者をつなぐ、春秋社、2012、211

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]特になし。

## 6 研究組織

### (1)研究代表者

森岡 正博 (MORIOKA MASAHIRO)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号: 80192780

### (2)研究分担者 なし

### (3)連携研究者 なし